私たちの生活と水の未来

沖縄県　兼城中学校　三年　塚本　一恵

三年前私は北海道から沖縄へ引っ越してきて、それまではテレビでしか見たことがなかった台風を目の当たりにした。強い風でバスが停まったり激しい雨が何日も続いており、自然の力にとても恐怖を感じていた。その台風の影響で、私達の家は三日ほど水が止まった。蛇口を捻っても水が出ず、生活の様々な場面で不便だった。断水一日目はまだ余裕があった。家に常備してあったペットボトルの水を使い最低限のことはできた。お風呂には入れなかったが、外出していなかったので、それほど気にならなかった。しかし、二日目になると水の量を気にしながら生活しなければならなくなった。手を洗うことでさえ躊躇するようになり今まで当たり前だった行動の一つ一つに迷いが生まれた。三日目になるとペットボトルの水もほとんどなくなり、水が使えないって生活がとても大変なのかと驚いた。お風呂に入れないことや食器を洗えないこと以上に、「いつ水が使えるようになるのか。」という不安が大きかった。このとき私は、水は日頃の暮らしで当たり前にあるものではなく、生活に欠かせない存在なのだと実感した。

この作文を書くにあたり、改めて自衛官として働く父に訓練の様子を聞いてみた。訓練のときは水が使えないことを前提に行動しなくてはならなく、飲み物などは飲めるけど、お風呂に入れなくて大変だと話していた。断水のときは「水が止まって最悪」「色々不便」などと不便さばかりに思っていたけれど父の話を聞いて、水が使えることはとても恵まれていることなんだと思った。

世界では約二十二億人いておよそ四人に一人が、安全に管理された水を使用できないと知り、私たちの生活がどれだけ恵まれているか改めて考えさせられた。そのうち約一億千五〇〇人が使っている水は湖や川、用水路から確保しており衛生的とはいえない環境で生活している。水道設備が整っていない地域では、女性や子供が遠くまで時間をかけて水をくみに行くので、収入を得る仕事をする時間がなくなったり、学校へ通うことができなかったりする現実がある。また衛生的に処理されていない水は子どもたちの健康に大きな影響を与え、命を落とす可能性があると知り、私たちが何気なく使っている水が、場所によっては命を落とす危険があるのだと考えさせられた。

私が経験した三日間の断水は、怖くて不安だったが、必ず終わるとわかっていたからこそ耐えられたのかもしれない。けれども終わりが見えていなかったらどうだったのだろう。もし安全な水が手に入らないのが当たり前だったら、どれほど心細いのだろうか。そう考えると、蛇口をひねれば水が出るのは当たり前の環境では決してなく、多くの人の努力や自然の恵みによって支えられていることに感謝したい。

水問題は遠い場所の話ではない。自然災害や気象変化によって、水の確保が難しくなることはこれからも増えるかもしれない。だからこそ、今ある環境に感謝して、水を大切に使うという意識を持ち続けることが必要だと思う。

日本は水に恵まれている国だと言われている。しかし、台風による断水を経験したことで、当たり前が自然災害によって簡単に失われることを知った。

では、私達にできることはなんだろう。支援活動に参加することが難しくても、日常生活の中で心がけることはできる。例えば、お風呂の時間を短くしたり、顔を洗うときに水を流しっぱなしにしないことが大切だ。また、自分が実践するだけではなく、家族や友達に共有し、行動してもらうこともできる。

私はこれからも、非常時に備える意識を高めて、水のありがたさを忘れずに行動することが、わたしたちにとってできる一歩だ。